

< 巻 頭 言 >



年 頭 の ご 挨拶

坂 本 忠 彦*

新年明けましておめでとうございます。

年頭に当たり会員の皆様のますますのご活躍と当会の発展を祈念申し上げます。

昨年は一昨年の自由民主党主体から民主党主体に政治体制が変化した中ではじまりました。平成22年度予算では民主党マニフェストの反映方法が焦点となり、ガソリン税暫定税率の廃止は見送られましたが、「コンクリートから人へ」のスローガンの下、公共事業費の大幅削減、ダム事業の見直し、高速道路の一部無料化社会実験などが行われ、社会資本整備にとっては厳しい環境が生まれました。経済面ではリーマンショックに端を発した低迷が続き、特に円高が不況感を強めました。6月には鳩山内閣が沖縄普天間基地移設問題の混迷などにより退陣し、菅内閣が発足しました。しかし菅内閣においても政治家の資金問題、外交問題、閣僚の失言問題などが相次いで発生し、平成22年度予算編成においてもマニフェスト実現と財源の競合があり、混迷している感があります。そのためか日本社会全体が活力を失いつつあるように感じております。

しかしながらダム関係者にとって明るい話題もありました。民主党主体の政権発足以来、前原国土交通大臣（当時）は八ツ場ダムの建設中止を明言し「今後の治水対策のあり方に関する有識者会議」を設置し検討を重ねておられましたが、昨年9月にはその中間取りまとめが発表され、各ダムの効果を客観的に評価する機運が生まれています。11月6日馬淵国土交通大臣は現地を訪問し、「私が大臣のうちには中止の方向性という言葉には言及しない。予断を持たず検証を進める」と発言されました。まさに予断は許しませんが、ダムの有用性、効率性を確信する私どもにとって一筋の光明を見いだした思いがします。

さて当会の昨年の活動を振り返ってみますと5月にベトナムのハノイで開催された国際大ダム会議（ICOLD）第78回年次例会への参加が最大のイベントでした。世界60ヶ国より約600名の参加を得て開催され、わが国からは吉越 洋国際大ダム会議京都大会組織委員会委員長をはじめ79名が参加し技術委員会での討議、シンポジウムでの論文

* (株)日本大ダム会議 会長・日本工営(株) 顧問

発表など活発な活動がおこなわれました。今回の年次例会は ICOLD に2005年に加入した新メンバー国のベトナムをホスト国として開催されたことからその成否が関心を集めました。おおむね所期の成果を挙げたものと評価できるものと思います。

日本にとっては2012年国際大ダム会議京都大会（ICOLD 2012京都）の日程などの開催概要がおおむね日本原案通り決定され、さらに例会の運営状況をつぶさに観察するなど、京都大会に向けた重要な成果が得られました。さらに元会長である廣瀬利雄氏が ICOLD Honorable Award を授与されるという慶事がありました。

例年行われていた EADC 会議（東アジア地域ダム会議）は一昨年の韓国のソウルでの会議で、日本、中国、韓国が各々2回開催したことにより今後は2年に1度開催することになり昨年度はありませんでした。

ICOLD 2012京都の準備状況ですが、2009年5月のブラジリアでの開催決定直後から本格的な準備が始まり、2009年10月1日には組織委員会（委員長：吉越 洋氏）および実行委員会（委員長：坂本忠彦）が発足したことはご承知のとおりです。実行委員会の下部組織として総務、財務・募金、運営、登録・会場、行事、ツアー、Dams in Japan 編集、課題討論、展示の各分科会が設置されております。これらの分科会において各分野について詳細な検討、準備が行われているところです。各分野の中間取りまとめにより Initial Bulletin を作成、ハノイの例会で配布、発表しましたが、その概要は以下の通りです。

- 1 2012年6月1日（金）の City Tour（任意参加）の後、6月2日の Technical Tour から始まり、技術委員会、年次例会総会、大会課題討議を経て6月8日（金）夜の送別会まで7日間。従来の9日間に比較して短縮。
- 2 主会場は京都国際会館、一部京都ホテルオークラを使用。
- 3 年次例会の総会の日（6月5日）に国際シンポジウムを同時開催。
- 4 大会の課題討議は2会場で平行開催して3日に短縮。

ハノイで日本原案に国際シンポジウムが追加されましたが直ちに組織委員会の下部組織として国際シンポジウム学術委員会（委員長：角 哲也京都大学教授）を設置するとともに、世界の著名なダム技術者25人で Advisory Committee（委員長：大町達夫東京工業大学教授）を編成し、諸般の準備にあたっているところです。

現在 ICOLD 2012京都に最大限の力を注いでいる感のある JCOLD ですが、国内の通常活動につきましても、企画委員会、技術委員会、国際分科会を始めさまざまな委員会活動、ダム技術講演討論会、見学会等も順調に実施してまいりました。会員の皆様、各委員会に参加の皆様、事務局等の関係者のご努力に深く敬意を表し御礼申し上げます。

本年もどうぞよろしく申しあげ、年頭のご挨拶といたします。